現代日本の音楽と日本人の美学

Modern Japanese Music and Japanese Aesthetics

数年前、イタリアのナポリで開かれた「タールベルク国債ピアノ・コンクール」の審査員に招かれたのを機に、「イタリアのピアノの教師に日本の現代音楽についてお話をしていただきたい」と誘われて行った講演内容です。会場は、ナポリとシシリー島のカターニアとシラクサの三ヶ所でした。それぞれ、イタリア語の通訳付きでした。

みなさま、こんにちは。イタリアの熱心な音楽家と音楽愛好家のみなさまの前で日本の文化について、それも私が大好きでご自慢の日本の現代音楽についてお話出来ることは大変な喜びであり名誉なことです。特に今回は、私が、音楽家としてもっとも尊敬し、またもっとも篤い友情を感じているジアンルーカ・ルイージ氏のお招きによるものであることも、私を大いに喜ばせ、感激させるものであります。マエストロ・ルイージとご関係のみなさまに心からなる感謝をささげるものです。マエストロ、ありがとう。みなさま、ありがとう。

本日のお話のタイトルは、「現代日本の音楽と日本人の美学」です。現代日本の作曲家として、武満徹と柴田南雄と黛敏郎の三人を選びました。三人とも、もう故人になりましたが、日本の伝統的な音楽を題材にした彼らの代表的な作品を聴きながら、「日本人の美学」についてお話ししたいともいます。

それでは、始めましょう。

武満徹(1930-1996)の「ノヴェンバー・ステップス」

武満の代表作

まず、武満徹です。武満の代表作は、なんといっても 「ノヴェンバー・ステップス」"November Steps for orchestra with shakuhachi and biwa “ です。この作品は、1967 年に開かれた、ニューヨーク・フィルハーモニー・オーケストラの創立 125 周年の記念祝賀コンサートのために作られたものです。ニューヨーク・フィルの常任指揮者をしていたレオナード・バーンスタインと指揮者の小沢征爾が、武満の「琵琶と尺八のためのエクリプス(触)」

"Eclipse for shakuhachi and biwa"(1966年)のレコードを聴いて、早速彼に委嘱してきたのです。"November Steps"は、その年の４月から８月にかけて作曲され、１１月９日にニューヨークのリンカーンセンターにあるフィルハーモニックｷホールで初演されました。琵琶は鶴田錦史、尺八は横山勝也、小沢征爾指揮のニューヨークフィルでした。大成功を納めました。これは、日本の伝統的な楽器である、琵琶と尺八をソロにした「二重協奏曲」です。現代音楽としては異例の演奏回数を誇るもので、初演以来、これまでに５００回近い再演がなされています。

11月の階段

"November Steps" とは、あえて訳せば「１１月の階段」ということになります。「なぜ、１１月か」と言えば、武満自身はなにもコメントしていないのですが、「ニューヨークでの初演が１１月であったからだ」と考えられています。さらには、日本の１１月の秋の寂しさがこの音楽のテーマだからです。それに、「なぜ、階段か」といえば、「武満の作曲の進歩段階の１１番目の試みであったからだ」という意見もあります。音楽的に見れば、武満自身が言うように、「区切りなく演奏される１１の並列されたステップスからなっている」からです。ここでいう階段の意味の「ステップ」は、日本の音楽の区切りである「段」を意味します。「段」については、また、あとで触れることにします。どちらにしましても、"November Steps" というこの短い言葉の中には、このような「凝縮された無限のイメージ」が含まれているのです。

四百種類以上の雨と風

日本語には、「雨」を語る言葉は、四百種類以上もあります。同じように、「風」の種類も雨と同じほどたくさんあります。シシリーでは、サハラ砂漠から吹いてくる熱風を「シロッコ」(sirocco)といって、ほかの風から区別するのとおなじです。「雨」や「風」の名前がそれぞれ四百以上もある国が、日本を除いて、世界のどこにあるでしょうか。「チーズが２４６種類もある国をどうして治められようか」とフランスの大統領のドゴールは嘆いていましたが、日本の自然は、フランスのチーズ以上に種類が豊富です。雨や風について多くの言葉が生まれるのも、日本に四季があるからです。春夏秋冬がはっきり分かれていることが、日本の自然環境を豊かなものにしているのです。それが、日本人の精神や文化に影響をおよぼさないはずはありません。日本人はすべてにわたって、自然と共に生き、自然と共に暮らしているのです。雨が降れば、その雨がどんな雨かを判断して、着る物や家の暖冷房や戸締まりを決め、農作物の対処もしなければなりません。それで、雨の状況を判断するのに、それぞれの雨に名前を付けることが大事なのです。

また、雨の降り方が、人生の教訓になることもあります。春の始まりに降る霧のような雨のことを「こぬか雨」といいます。細やかな雨粒が細かいお米の糠(ぬか)のようなので、こう呼びます。「親のバチと小糠雨は当たるが知れぬ」ということわざがあります。これは、小糠雨は霧のように細かいので気にせずにそのままでいると、いつの間にかびしょ濡れになっています。親を日頃から敬わないと、親不孝の報いはいつとはなく受けることになります。

日本音楽は聞かせるよりも聴く音楽

伝統的な日本音楽もまた、共時的であり演出型です。大きな音を出して聴かせるのではなく、小さな音で相手に聴いてもらう音楽だからです。いえ、聴いてもらうのではなくて、聴きたい人が聴く音楽が日本音楽です。日本人は、川の流れの音や風の音や木の葉のそよぎを聴きます。その音を聴くことで心を鎮めます。禅の「公案」の一つに、ポンと両手を打ち鳴らして「どちらの手が鳴ったか」とか「片手の音を聴け」といった難問があります。これも、聞こえていないものを「自らが努めて聴く」ということに大きな意味を見いだしているのです。ですから、日本人は、物言わぬ自然からでも音を聴くように音楽を聴くのです。このことが日本音楽にとって重要なのは、「この世の中にあるどんな音にも、いや、無音にも音がある」という、禅の「無」や「空」の認識へとつながっていくからです。

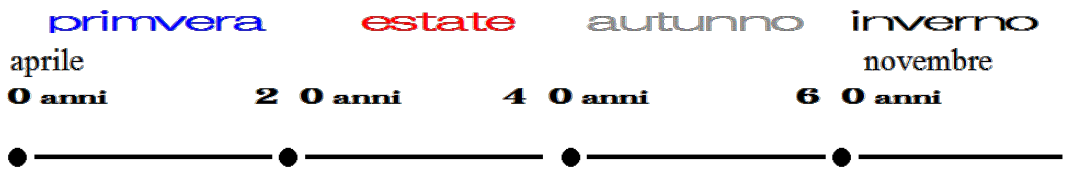
秋の風と雨

それでは、武満徹の "November Steps" を聴きましょう。この作品は、二つのソロ楽器とオーケストラによる二重協奏曲です。日本人が強く感じる美は、自然との同化であり、自然への憧れです。とくに、風や雨は日本人にとって、もっとも日常的に親しいものです。

私は、武満が、"November Steps" で選んだ日本の伝統楽器が、他ならぬ琵琶と尺八であったことに象徴的なものを感じます。琵琶の音は、突然、前触れもなく、パラパラ降る「雨」であり、尺八の音は、突然、前触れもなく、ヒューッと吹く「風」だと思うからです。

自然の四季と人生の四季

日本の一年は四つの季節に分けられます。すなわち、「四季」(quarto seson)です。日本人は、自分の生涯を「四季」に分けます。すなわち、生まれてから２０歳までを「春」、２０歳から４０歳までを「夏」、４０歳から６０歳までを「秋」、６０歳から亡くなるまでを「冬」とするのです。それで、１１月は、人生の秋から冬にかけてです。



武満が、寒くて、暗くて、悲しげな日本の１１月を、すなわち私たちの寂しい人生の「秋」を、竹林に吹く風の音と竹林に降る雨の音によって、美しく、色彩的に表現したのがこの "November Steps" です。そして、オーケストラは雨と風の調べを聴く聴衆であり、音楽の解説者であり、ソリストの共感者であり、反対に異議を申し立てる批評家でもあります。すなわち、ここでのオーケストラは、古代ギリシャ悲劇の「合唱隊」(coros)の役割を担ってい

るのです。

黛敏郎(1929-1997)の「涅槃交響曲」と「文楽」

梵鐘と声明

黛敏郎は、仏教寺院の大きな鐘の音を聞いて、これを音楽の新しい音源として利用することを思い立ちました。この大きな鐘は、仏教の寺院で日夜お祈りの合図に鳴らされるもので、梵鐘(Bonshou)といいます。鋳物でできた大きな鐘ですから、ノイズも混じって、複雑で神秘的で、荘厳な響きがします。彼は、この鐘の音を電子工学的に分析して、そこに含まれている音色や音の高さや雑音やうなりや響きを楽譜に書き取りました。そして、鐘の音をオーケストラの楽器と組み合わせることで再現しようとしました。黛敏郎はこれを、「カンパノロジー・エフェクト」(Campanology　Effect)と名づけました。この「梵鐘効果」と、もう一つ仏教のお経を読む声である「声明」とを交互に用いて書かれたのが「涅槃交響曲」(Nirvana-symphony,1958)です。

二つの12音技法

「声明」は「１２音技法」を用いて書かれています。むろん、ここでいう黛の「１２音技法」は、シェーンベルクの「１２音技法」(dodecafonia)とは全く反対の性格を持つものです。黛は、１２部の男声合唱を使って音階の１２の音すべてを「同時」に、この「同時」(simultaneously) というのが大切なのですが、「同時」に歌わせるのです。すなわち、古いお経の文句が１２の音程で一斉に歌われます。ただし、旋律として歌われるのではなく和声として歌われるのです。音程を変えないで、男声合唱による平行２度から平行１２度までの響きが「汚く」響きわたります。ピアノのオクターヴの鍵盤をすべて同時に叩きつづけるのと同じことです。その反対に、シェーンベルクの１２音技法は、１２の音をすべて一つづつ交互に使ってメロディを書きます。１２音の密集和音ではなく、単旋律です。

涅(ね)　槃(はん)

「涅槃交響曲」の涅槃とはなんでしょうか？　これは、仏教用語でお釈迦さまが亡くなられたことをいいます。梵語の「ニルヴァーナ」(nirvana)の発音を写したもので、もともとは「吹き消すこと」や「吹き消した状態」をあらわします。ただ、お釈迦さまが亡くなったことを言うのではなく、燃えさかる欲望や情念といった煩悩(ぼんのう)の火を消し去って、悟りの知恵を得たことを意味します。ですから、亡くなった人たちの魂の救済を目的としたキリスト教の「レクイエム」とは全く意味が異なります。

編　成

1957 年に東京で初演されました。全６楽章からなる４０分ほどの大曲です。６管編成の大オーケストラに、打楽器がたくさん加わります。グロッケンシュピールと鈴とティンパニとシロフォンと鐘とヴィヴラフォンとタムタムとシンバルと鐘とエギュなどです。それに、チェレスタとハープもあります。６人の男声ソリストと１２部に分かれた男声合唱も参加します。合唱団は、６０人から１００人と指定されています。

柴田南雄(1916-1996)の合唱曲「追分け節考」

日本料理

黛の「１２音技法」とシェーンベルクの「機能和声」の違いは、そのまま日本料理とイタリア料理の違いでもあります。イタリア料理は、テーブルに座るとまずお皿が一枚置いてあります。そこへオードブルが運ばれてきます。あなたがオードブルを食べ終わるとそのお皿は取り除かれてパスタのお皿があなたの目の前に現われます。パスタを食べ終わると、カラのお皿の代わりにお魚が出てきます。…という具合に、あなたの前にあるのは常に一枚のお皿です。料理は、常に時間軸に沿って縦に進んでいきます。

演出型料理

ところが、日本料理は違います。あなたが座ると、もうすでにテーブルの上には色とりどりの料理を盛ったお皿が並べられています。お刺身やテンプラや焼き魚や煮魚や酢の物や野菜の煮物やみそ汁や茶碗蒸しやご飯や漬け物や桃や柿が、ところせましと並べられています。あなたはどれから食べようかと迷うことでしょう。むろん、どれから食べてもかまいません。西洋料理の伝統やしきたりや規則に従うことはありません。料理をもってくるウエイターを待つこともありません。スープの前に揚げ物を食べてもかまいません。果物はデザートではありませんから、辛い焼き魚を食べたあとでガブリとかじってもかまいません。日本料理は食べ手が演出するのです。私は、西洋料理の「鑑賞型」に対して、日本料理は「演出型」(Japanese producing style)といおうと思います。

障子と襖

料理はそのまま、文化の違いでもあります。日本文化は演出型で、西洋文化は鑑賞型です。西洋の家屋と日本の家屋を比べてみましょう。日本家屋の各部屋は、固定された壁ではなくて、取り外し可能な障子や襖で区切られていま

す。この障子や襖は、いつでも片隅に押しやったり取り払うことができます。結婚式や葬式があると、たくさんの人がやってきます。そのとき、二つや三つの小さな部屋が、突然大きな一つの部屋になるのをみてみなさんは驚かれることでしょう。このときの演出家は、家庭の主婦です。広くなった長細い部屋に、次々と座布団を並べて、お客さまをどんどんと座らせていきます。すなわち、各自が自由に演劇的空間を形成するのです。これを「演出的空間」といいましょう。これは、各部屋が壁で区切られている西洋家屋にはできないことです。みなさまは、仕方なく、壁に絵や写真を飾って眺めることになります。これを「鑑賞型家屋」といいます。

偶然性の音楽

柴田南雄(1916-1996)の合唱曲「追分け節考」では、たくさんの合唱グループが、会場へ列をなして入場してきます。それぞれにステージの袖や、客席の扉からどんどん歌いながら入ってきます。ステージの上だけではなく、客席の中でも歌うのです。ホールは、日本家屋の自由な空間です。いくつもあるそれぞれのグループは、番号によって 20 のグループ分けられています。ステージの中央に立った指揮者が、数字を書いた札の付いた竹の棒をいくつも持っていて、それをアトランダムに前にある竹筒に刺していきます。すると、竹筒の番号で指名された合唱グループが、てんでに歌い出す。民謡もあれば、童歌もある。手まり唄に合わせてお手玉をする着物姿の少女たちのグループもある。指揮者が竹の棒を抜いたり刺したりすると、それに連れて会場の音楽がさまざまに変化する。「偶然性の音楽」(Chans Music)です。

私たちは新しく２１世紀を迎えましたが、彼ら三人の跡を継ぐ、優れた若い作曲たちも元気に育って来ています。彼らは私がこれまでにお話しした日本音楽の四つの特色にさらに多くの特色を加えてさらに新しい日本の現代音楽を作っていくことでしょう。またそのときには、私もこれまでの意見を訂正し補強するために大慌てでみなさんのところへやってこなければならないでしょう。

では、それまでさようなら。